立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院学生研究
２０１５年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科　ドイツ文学専攻	
研究代表者（2016年3月現在のものを記入）	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科・ドイツ文学・2年	二藤　拓人　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	立教大学文学部・教授	前田　良三　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　[人文]　・　社会	**個人・共同の別**	[個人]　・　共同　名
研究課題	Fr.シュレーゲルの断片的思考－書字行為としての断片形式と「機知」概念－		
研究組織（研究代表者・共同研究者）※2016年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	立教大学院・ドイツ文学専攻・博士課程前期課程2年	二藤拓人	
研究期間	２０１５　年度		
研究経費（1円単位）	（支出金額）200,000円／（採択金額）200,000円		

研究の概要（200～300字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究において私は、18世紀末のドイツにおける文芸批評家フリードリヒ・シュレーゲル（1772-1829年）の初期著作集（1795-1804年）に焦点を当て、彼が著作の際にとりわけ好んだ「断片」（Fragment）というアフォリスム的表現形式が自身の思考そのものに如何に関わっているかを彼のテクストに即して論究した。その際、シュレーゲルの文学理論において中心的な役割を担った「機知」（Witz）の概念を彼の独自の「断片」概念との関連の中で捉え直すことを分析の糸口にした。彼自身の思索活動と密接な関係をもっていた「断片」形式を、とりわけ彼（書く主体）自身の書記行為という観点から再検証する本研究は、従来の初期ロマン派研究史においても特異な立場を取っている。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　ドイツ・ロマン主義美学　〕〔　脱主観的エクリチュール　〕〔　部分と全体性　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究は当初の研究計画に沿いながら大幅な変更なく着実に遂行され、同年度に提出・受理されたドイツ語による修士論文 „Schreiben im/als Fragment – Form und Gedanken des Darstellungsmoment bei Friedrich Schlegel“（断片を書く—初期フリードリヒ・シュレーゲルにおける表現のモメントの形式と思考）によって具体的かつ生産的な成果を上げることができた。以下に本修士論文の日本語要約を行いその報告とする。

本論文はシュレーゲルの表現形式である「断片・断章」の特異性を、とりわけ書く行為の形式として論究した。その際に、書き手の思惟が断片として書き込まれる過程を、それが活字として露わになる「断片化」(Fragmentierung)の瞬間とともに詳細に明らかにしようと試みた。この書記行為の現場（Schreibszene）を注視すれば、近代的な「作家」の統一的な主観性は中断され、彼は「書いている主体」と「(自分が書いたものを）読んでいる主体」という不連続な二重体としてこの行為にかかわることになる。このような、発話されたもの／書かれたものが主体の意図を離れ、孤立し、必然的に「他者性」（Andertheit）を有するというエクリチュール一般の理論に従い、またジャック・デリダ（Jacques Derrida, 1930-2004）ないしフリードリヒ・A・キットラー（Friedrich Adolf Kittler, 1943-2011）の書字論に倣いながら本論文で書く行為としての断片形式を規定した。つまりこの形式において作家は、自分が書いていることと（それを）理解することとの一貫した循環を切断され、同一的な自己へと再び自身のエクリチュールを回収する余地を失ってしまう。それどころかこの書記形式では、言語表出の際に生じる他者性ないし回帰不可能性が、活字を媒体とするが故により顕著に先鋭化し可視化されるのである。

以上が本論の総論であるが、これを踏まえて以下に各章で行われた分析の詳細を示す。

第一章では、本論の前提となる文字・活字（Schriftzeichen）の言語的な性質を書く行為（Schreiben）と読む行為（Lesen）との関連において考察した。さらにここで、シュレーゲルが当時の活版印刷術の発展に応じて拡大する読書文化や書物に新たな可能性を見ており、音声言語ないし口頭対話の流動性（Flüchtigkeit）に対して、活字メディアの耐久性（Dauerhaftigkeit）に大きな関心を抱いていた点を指摘した。この補足を通じて、本論で「断片」を彼の言説に倣って「書かれた芸術作品」（geschriebenes Kunstwerk）として書記形式に限定して扱うことの十分な根拠を提示した。また彼は、人間「精神」（Geist）が持つ無制限の能力に対しても「活字」（Buchstabe）の潜在的・機能的な優位を見ていたことで知られるが、その理由として彼は、読む行為においてある書物が常にその著者の意図を克服する可能性があることに言及している。一般的に解釈学の原型として理解されるこの対比を、本論においては書き手の統一的な主観性と書かれたものの非人称性（物質性）との対比として論究した。

シュレーゲルにおける「断片」形式の時代的、思想的な独自性を明瞭に位置づけるために、第二章はこの用語の概念史、理念史および美学上の扱いについて先行研究を参照しながら整理した。「断片とは世界から切り離されそれ自体で完成した芸術作品である」という趣旨の彼の定義が断片概念の戦略的な意味の転倒を示している通り、「断片」とはとりわけ初期ロマン派における概念使用以来、矛盾の形式として理解される。つまりこの形式は一方で、一般的な意味における「破片」、ないし細かく砕くことを意味するラテン語由来の意味における「壊れやすさ」から規定される「未完成」、「不完全」という語感を残したままである。しかし他方でこの性質を意識的に利用する文学形式としては、受け手に自由で開かれた解釈の余地を提示する狙いから、完成した作品あるいは意図して未完にとどめた作品が作家によって「断片・断章」と呼称されることがある。後者の言語使用が孕む矛盾を最大限に強調したのが、上述したシュレーゲルの記述である。しかし一般的な断片概念の理解は、特に 20 世紀後半からのポストモダン、ポスト構造主義の思想潮流の中で、(既にロマン派においても）常に前者のイメージが先行してきた。この問題点を踏まえ、本論ではこの矛盾の形式における特異性をシュレーゲルの意図に倣って、断片の「閉鎖性」（Abgeschlossenheit）の方向から論究する立場を設定した。(アフォリスム形式との比較検討を行った第三章に関する報告は割愛する。)

第四章においては、シュレーゲル自身が自らの表現形式である「断片」に対して、直接的ないし間接的に言及し定義している箇所を取り上げ、テクスト内在的に解釈を行った。その際に、このテクスト形式の中で扱われる内容的な特性、個々の断片の特性、集合体としての断片の特性の三点について、具体的にはそれぞれ、概念規定や定義の場としての断片、閉鎖的な断片の「個体性」（Individualität）や「絶対性」（Absolutheit）、そして各断片の「中心化」（Zentralisierung）と断片同士の「ネットワーク化」（Vernetzung）について論究した。なお、これまでに初期ロマン派研究の中で、「断片」とその対概念である「作品」や「全体」が、シュレーゲルの他の術語群と関連付けられて再構成されることは極めて稀であった。この章では研究史的な意義も踏まえて、多くの箇所でシュレーゲルにおける「断片」を観念的かつ多面的に理解することに重点を置いている。それに伴い、本論で設定した書記行為との関連の中での検証は部分的な言及にとどめてある。

この章ではじめに問題にされた断片の内容面での特徴として、シュレーゲルによるこのアフォリスム形式が、きわめて抽象的な概念操作と実験的な術語の結合関係を見出すための「概念定義的」（begrifflich, definitorisch）な表現

研究成果の概要　つづき

形式であることが指摘できる。この限りにおいてシュレーゲルの断片内の表現形態は、一方で他の風刺、道徳、教訓を説くアフォリスムの日常的な汎用性と比べて非常に専門的、密教的であり、また他方では、寓意的、比喩的ないし詩的アフォリスムが持つ解釈や意味の多様性とも異なっており、この形式は極めて限定的で排他的な言語の意味作用を発揮する場と理解することができるだろう。

次に行われた分析において、断片作品の個体性についてのシュレーゲルの思想的立場は、美学における「現実／理念」、「部分性／全体性」、あるいは所謂のスピノザ論争（1785-1789）に端を発する、当時の自然神学的言説のトポスである汎神論を前提とした「一／全」といった図式の解体、綜合ないし反転に基礎を置いている。この際シュレーゲルの覚書や残された構想、書簡からは、断片という書記の密度、質的な簡潔さ（Kürze）ないしは体現する思想の重たさ（Gewicht）を最大限に際立たせることが目指されており、その結果、失われた全体としての部分（断片）が全体性に匹敵するほどの潜在能力を有するとされる。

ここまでの議論で主に断片の観念的な意味作用、作品成立までの理念が問題になったのに対し、第四章の最後では、むしろ現実の世界に具体化された状態の作品の性質に焦点が当てられる。断片作品が生じるその瞬間は、局所的、一回的、あるいは突発的（シュレーゲルの術語に倣えば「絶対的」）な契機として理解されたが、現実化された断片においてこの性格は反転し、あらゆる個別・個体性は極端に相対化されることになる。ここで本論は双方の相反する特性を絶対的な矛盾として複合させて解釈するのではなく、一方を断片化ないし現実化の「以前」、他方を断片化の「事後」として段階的に論じることでシュレーゲルの言説に一貫性を見出そうと試みた。事後的に現実化された複数の断片とは、すなわち「書かれたもの」に属するが、これが有する必然的な「非人称性」（Anonymität）や「非主観性」（Subjektlosigkeit）は、シュレーゲル自身の構想する断片集においてもとくに強調されている。この特性を本論では、断片を書く行為が作家の主体を分断する際に生じる物質性や他者性のことを言い表していると判断した。ただしここで提示される（断片としての）テクストは、それでいて内実を失った空虚さや不確かさを支持するものではなく、常に他から隔絶され、強固な閉鎖性が保たれるよう意図されている。

第五章ではシュレーゲルの中心概念のひとつである「機知」を書記行為との関連において論究した。彼が展開するこの広範に及ぶ述語の分析において、まずこの能力を天才（Genie）や発明（Entdeckung）、発見（Erfindung）そして結合術（Kombinatorik）との類似や差異化を通じて概観した。その上で、特に断片化に関わる機知についての分析に焦点を絞り、この書いている／読んでいる際に生じる外的な結合要因を知的な「偶発性」（Kontingenz）と定義した。なおこの文字・活字に関係する機知は、シュレーゲルの思考においても同様に「本質的な機知」（der eigentliche Witz）であると高く評価されている。偶発性に基づくこの結合の契機は、論理的な因果関係や体系的一貫性を相互に見出すことが不可能である断片集の非連続性（Diskontinuität）において、唯一連続性（Kontinuität）を見出す特異な契機であると理解することが可能である。ここで偶発性とは、シュレーゲルの用語の中では「論理的恣意」（logische Willkür）として理解され、これは詩的なイメージの連想や着想の戯れによって生じる「比喩的な恣意」とは明確に区別されるべきである。異質なもの、排除的なもの同士である断片間のネットワーク化と関係するこの偶発性を、断片化の現場における「読んでいる主体」が（断片として）書かれたものに関与しながら次の断片化に移るために不可欠な契機として定義した。

本論文は分量だけでも 100 ページを超える大作となり、難解なシュレーゲルのテクストを綿密に分析しその結果を体系的に叙述した論文として、今後も積極的な評価が期待される。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①
なし

②
なし

③
なし

④学会発表
・二藤拓人　個人口頭発表、使用言語：日本語（査読あり）
表題：　Fr.シュレーゲルにおける書記行為と断片形式
―『ゲオルグ・フォルスター』を手掛かりに―
〔日本ヘルダー学会 2015 年度春季研究発表、立教大学池袋キャンパス、5 月 2015 年〕

・二藤拓人　個人口頭発表、使用言語：ドイツ語
表題：　Zäsur als Moment der Neutralisierung.
Zur Technik des Schreibens im „Fragment“ Friedrich Schlegels.
〔日本独文学会主催第 58 回文化ゼミナール、長野県蓼科リゾートホテル、3 月 2016 年〕